

# 観光の本義を求めて

- 和歌山大学観光学部設置記念論集の発行にあたって -

学部長 大橋 昭 一

平成20年4月、和歌山大学観光学部は発足した。これは、1年前、平成19年4月に和歌山大学経済学部のなかに観光学科として設置したものを学部を発展させたものである。観光学科設置、観光学部設立は、ひとえに文部科学省はじめとする中央各機関の関係者、和歌山県はじめ地元の関係者のご支援の賜物である。このことに対して、何よりもまず、深甚なる謝意を表すものである。

本学部は、観光学部と銘うった国立大学初のものであり、学部の教職員一同、何よりもまず、責任の重さを痛感している。観光は、現在における最大の成長分野であり、その研究・教育の柱となる観光学は21世紀の学問といわれている。観光についての研究は、欧米等ではかなり以前より盛んに行われ、国際的学術雑誌もいくつかあって、その研究の広さと深さは実に驚くべきものがある。わが国の立ち遅れはいうに及ばない。

これは、わが国では明治以来、高等教育機関をはじめとする研究・教育において、重点が物の豊かさを促進するところにおかれてきたことに根本的原因がある。物の豊かさは、人間幸福上の重要問題であり、それが、かなり低い水準にあったわが国のもとでは、そして旧来のように物の豊かさが人間生活の基底をなすと考えられてきた限りにおいては、これは正当なものであったが、今やその考え方を換え、物以外のところにも人間生活の幸福はあるという考えにたつことが必要になっている。

ちなみに、平成20年版わが国『観光白書』によると、「今後の生活の力点をどこにおくか」について、第1位に「レジャー・余暇生活」と答えた人が最も多く（平成19年：35.1%）、「食生活」（28.3%）、「住生活」（23.1%）を大きく引き離している。「レジャー・余暇生活」を第1位にするのが最高になったのは昭和58年からで、それまでは「住生活」であった。

しかも今日、人々の関心は、単にレジャー・余暇の時間があればいいというのではなく、その時間の過ごし方、その内容の充実におかれているのである。それを人々は観光に求めている。観光が注目されている根源はここにある。

アメリカのゲルドナー／リッチーは、マズローの欲求5階層説を観光・旅行にも適用し、自己実現のための観光というレベルがあるといっている（注1）。自己実現は、これまでは仕事などにこれを求める人が多かったが、今や観光に求める人が多くなっているのである。

和歌山大学観光学部が研究・教育の原点においているのは、自己実現というこの観点である。観光という言葉はもともと『易経』にある「觀国之光，利用賓于王」から来たものといわれ、安政2年にはオランダ政府から幕府に贈られた軍艦「スンピン号」に「観光丸」という名前が付けられた歴史的事実があるが、今やこの原点に帰って「国の光を観る」という精神を根本におくべ

きものとする。こうした観点からいっても、観光はこれを広い分野からアプローチすることが必須であり、本学部はこれを基本理念としている。

アメリカでは、1990年代に「観光 (tourism) とはすなわち観光産業 (industries) のことだ」という見解に対し、「観光はもっと広いものだ、観光産業はその一部にすぎない (partial industrialization)」という見解が提示され、論争になったことがあるが(注2)、この点からいえば、本学部は後者の観光を広くとる見解に立脚しており、世界的動向にもマッチしている。

さらに、観光のとらえ方については、例えば、再帰的近代化論で世界的に有名な論客ラッシュとアリーは、現代社会のポスト・フォードイズムの傾向にもからめて、旧来のようないくつかの所を見て廻る観光・旅行、すなわちツーリズムは基本的には終わった。つまり、「ツーリズムの終焉」(end of tourism) が起きていると論じている(注3)。

ラッシュ/アリーは、旧来のツーリズム的なものが不要になったというのではないとわざわざ断っているが、今や「新しい観光概念」が必要になっているという主張は聞くべきところが大きい。それをどのように作ってゆかが現在われわれに課せられた大きな課題であるが、それには、観光を広い視野から改めて見つめ直すことが有力な方法になるものとする。

こうした観点にたつて、本学部のカリキュラムでは、地域再生を大きな柱の1つとし、他大学にはない「華道」「茶道」「着物文化論」「天文」「映像」「色彩」「音楽」等も重要科目として設置している。こうしたところから、現在世界的に求められている「新しい観光」は作り出されるものと信じている。観光の原点に帰ることは、取りも直さず、新しい観光を創造することである。

他方において、本学部の教育面では英語教育に特に力を入れている。正課以外にエクステンション授業を行い、正課以上の時間をこれにあてている。教育の面では「精神は日本、言葉は英語」という人材の育成をモットーにしている。これが現在わが国で必要とされる観光人のイデアールタイプであると確信する。

研究・教育面では、さらにフィールド研究を重視している。観光を広くとり、新しい観光の創造をスローガンとするわが観光学部としては、学生たちに「作られた観光」を学ぶだけではなく、自ら「観光を作り出す」という問題意識をもち、意欲をもって地域に出かけ、そこで観光を見出し、発展させる態度をとることを強く要望している。

わが観光学部に課せられている課題は、実に大きく、かつ重い。内外の多くの研究機関・研究者との緊密な連携、協力のもとにこの課題を十二分に遂行したいと念願している。この観光学部設置記念論集は、間もなく発行予定の観光学部学術論集、いわゆる紀要の実質的創刊号という位置づけのものである。大方のご批判、ご高評、ご叱声を心からお願いするものである。

本学部は小田 章学長の特段の見識と強いリーダーシップとにより生まれたものである。小田 章学長にはさらに、本論集発行にあたり、用務ご多端のなかを2つの挨拶文をよせていただいた。学部を代表して心からなる感謝の意を申し述べるものである。

(1) Goeldner, C. R./Ritchie, J. R. B., *Tourism*, 10th ed. Hoboken: John Wiley & Sons, 2006, p.257.

(2) Leiper, N., Partial Industrialization of Tourism, *Annals of Tourism Research*, 1990, Vol.17, pp. 600-605.

(3) Lash, S./Urry, J., *Economies of Signs & Space*, London: Sage Publications, 1994 (reprint, 2002) p.259.